

詩における指示詞の役割

——金子みすゞの詩を例に——

池 増 結 実

0. はじめに

0.1. 研究目的

私たちは詩を読むとき、その文章を読んで受けた印象や感性などで作品を味わうことが多い。1つ1つの言葉が持つルールを意識しながら、文章を読むことはあまりしない。本論では普段とは異なる観点、言葉の用法という観点から詩の解釈、表現を見ていく。今回は指示詞を取り上げる。指示詞は、「りんご=赤い色の果物」というような、物体や行動、感情などの意味を表わすものではない。指示詞は談話に登場する人やもの、場所や時間、抽象的な概念などを指し示す言語表現である（日本語記述文法研究会2009, p.15）。本論では、特定の意味を持たない指示詞が詩の解釈、表現においてどのような役割を果たすかを考察する。指示詞の用法を詩にあらわれる指示詞に当てはめ、詩において指示詞が何を表現しているか、指示詞は読者に何を感じさせるかを明らかにしたい。

0.2. 使用する資料

本論で分析する詩は金子みすゞの詩を使用する。全童謡集『美しい町・上/下』『空のかあさま・上/下』『さみしい王女・上/下』に掲載されている詩のなかから、指示詞が表れる詩をいくつか選び、資料として用いる。

0.3. 本論の構成

本論は以下5節から構成される。1節では指示詞の分類に触れる。2、3、4節では、1節で分類された各種指示の先行研究の提示とそれぞれの指示詞があらわれる詩の分析を行なう。5節は結論とする。

1. 指示詞の分類

庵 (2007) は指示詞を照応表現の用法によって大きく2つに、「テキスト外指示」と「テキスト内指示」に分けている¹。庵は「テキスト外指示」を「指示対象がテキスト内に義務的に存在しない場合の指示」(庵2007, p.42)と規定している。すなわち、指示対象が文もしくは文章の外にある場合の指示である。それに対して「テキスト内指示」は「指示対象が義務的にテキスト内に存在する」(庵2007, p.40) 場合の指示である。庵は「テキスト外指示」に属するものとして現場指示、絶対指示、観念指示、視点遊離指示を挙げている。一方「テキスト内指示」に属するものに文脈指示を上げている。本論ではこのうち現場指示、観念指示、そして文脈指示を取り上げる。

2. 現場指示があらわれる詩の分析

2.1. 現場指示とは

発話の現場において認知できる対象を指示するものを現場指示という。

[1] [机の上にある本をさして]「これは友達から借りたものです。」²

例文の「これ」は、机の上にある「本」を表し、発話がなされている現場に存在しているものである。日本語記述文法研究会 (2009) では、現場指示³を融合型と対立型に分類している。

まず現場指示の融合型とは、日本語記述文法研究会では、話し手が聞き手との位置を同一的に捉えていることだと書かれている。金水・田窪 (1990) はそれに加え、独り言 (話し手のみ) の場合も融合型であるとしている。融合型では、話し手 (聞き手がいる場合は話し手と聞き手両方) から近い距離にあるものをコ系の指示詞で示し ([2a])、遠い距離にあるものはア系指示詞で示す ([2b])。

[2] a. [クーラーの効いた部屋に友達と一緒にいるときに]「この部屋涼しいね。」

b. [友達に、車の中から遠くの学校を指して]「あの学校に通っているの。」

そのどちらでもない場合はソ系指示詞で示す。

融合型の現場指示では、話し手と聞き手の位置を、話し手は図1のようにとらえている。

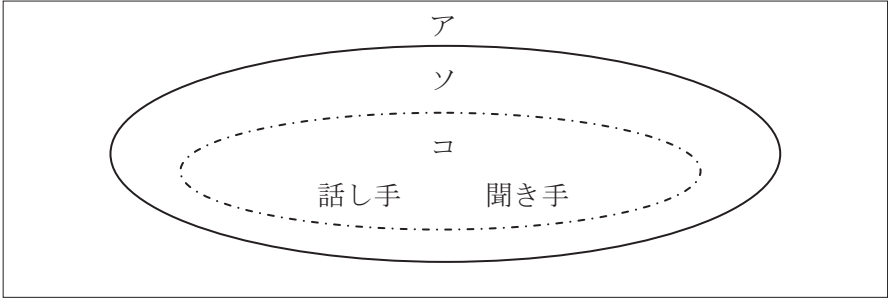


図1 融合型の現場指示

出典：日本語記述文法研究会編（2009, p.28）

次に現場指示の対立型とは、日本語記述文法研究会によると、話し手が聞き手との位置を対立的、相対的にとらえているものとしている。話し手の身の回りにある対象はコ系指示詞であらわし（〔3a〕）、聞き手の身の回りにはソ系の指示詞が用いられる⁴（〔3b〕）。

〔3〕 a. [話し手が持っている本を指して] 「この本、あなたのですか？」

b. [聞き手が持っている本を指して] 「それ、私のです。」

話し手、聞き手どちらにも近くない対象はア系指示詞であらわされる。

現場指示の対立型の場合、話し手は聞き手との位置を図2のようにとらえている。

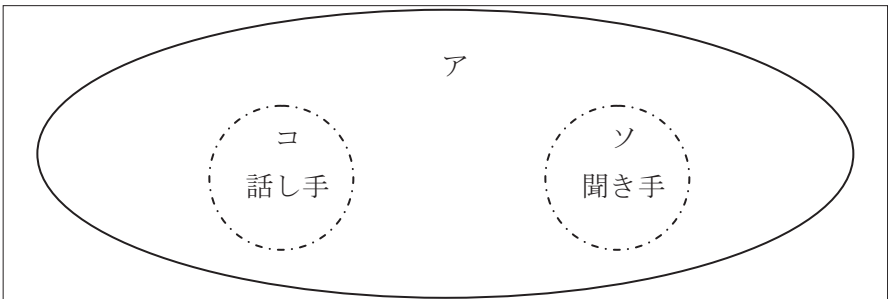


図2 対立型の現場指示

出典：日本語記述文法研究会編（2009, p.27）

現場指示とは発話の現場で認知できるものを指示対象としているが、詩において読み手は指示対象を認知できない。読み手に指示対象が見えない詩において現場指示が使われることで何が表現され、読み手に何が伝わるかを考察していく。

2.2. 指示対象の中にいる語り手 ～襖の絵～

襖の絵

ここはねむりの森なのよ、
わるい仙女に呪われて、
みんなねむった森なのよ。

赤い帽子のきつつきは、
檜にとまって、目をあいて、
つつきかけて、ねむってる。

咲いた桜の木のそばにゃ、
羽のひろげて、とびかけて、
二羽のめじろがねむってる。

花もねむって散りもせず、
風もねむってゆれもせぬ。

ここはねむりの森なのよ、
ながいねむりの森なのよ。

(金子2004a, p.126)

まず、この詩にあらわれる指示詞は現場指示の融合型か対立型かどちらだろうか。この詩の第1、4連では「なのよ」と語り手⁵が誰かに呼びかけている表現がみられる。しかし、詩の中に聞き手は登場していない。語り手が聞き手との位置を対立的にとらえている表現は出てこないため、この詩にあらわれる指示詞は現場指示の融合型だといえる。

この詩にあらわれる指示詞は第1、第4連の「ここ」である。「襖の絵」という詩の題名から、「ここ」が「襖の絵」を指していることが読み取れる。「ここ」は場所を指す指示詞である。「襖の絵」は場所ではなく物なので「ここ」という指示詞より、ものを指示する「これ」を用いて指す方が適当だと思われる。しかし、「襖の絵」を「ここ」と指示する場合と「これ」と指す場合では、詩から受ける印象が大きく変わってしまう。

[4] これはねむりの森なのよ

と表現をした場合、襖に描かれているのは「ねむりの森」というただの絵を紹介しているように感じる。語り手が、一般の人と同じように、「襖の絵」を2次元のものとして捉えていることが感じられる。一方で「ここ」と表現されることは、語り手が「襖の絵」をただの絵ではなく、場所としてとらえている印象を受ける。「襖の絵」が3次元の世界だという新しい発想が与えられる。詩のなかの「襖の絵」の世界が広がる。

また、コ系指示詞は語り手から指示対象に近い距離にあることを示している。

[5] あそこはねむりの森なのよ

A系指示詞にすると、語り手と指示対象の距離が遠くなる。「あそこ」の場合は語り手が「ねむりの森」の中にいないことが明らかである。一方「ここ」の場合は、語り手が「襖の絵」を近くから指示している状況だけでなく、語り手が「襖の絵」の世界の中にいるイメージを思い浮かべることができる。

前述したが、この詩には聞き手は登場していない。だが、語り手が誰かに呼びかけをしている表現はある。このことから読者には、読者自身が聞き手であると解釈することも可能である。その場合、この詩の指示詞は融合型であるため、読者は語り手と位置が同一的になる。読者も語り手と一緒に「襖の絵」の世界に、「ねむりの森」の空間にいるように感じられる。

この詩で「ここ」という指示詞が使われていることで、2つのことが表現されている。1つは、語り手が「襖の絵」を物ではなく場所として捉えていること。2つ目は語り手の近くに「襖の絵」があること。もしくは語り手が「襖の絵」の世界の中にいることを表現している。

2.3. 語り手の現場と読者の現場 ～このみち～

「襖の絵」に表れる指示詞は語り手の現場にある対象を指していた。現場指示は語り手がいる現場の対象を指示するものである。では文字通り語り手の現場にあるわけではないものを現場指示として指示することはあるだろうか。次の詩では4つの指示詞があらわれるが、そのすべてが語り手の現場にある対象を指しているのだろうか。

このみち

このみちのさきには、
大きな森があろうよ。
ひとりぼっちの榎よ、
このみちをゆこうよ。

このみちのさきには、
大きな海があろうよ。
蓮池のかえろよ、
このみちをゆこうよ。

このみちのさきには、
大きな都があろうよ。
さびしそうな案山子よ、
このみちを行こうよ。

このみちのさきには、
なにかなにかあろうよ。
みんなでみんなで行こうよ、
このみちをゆこうよ。

(金子2004b, p.136)

この詩では4つの聞き手があらわれる。第1連では「榎」、第2連では「かえろ」、第3連では「案山子」、そして第4連では「みんな」が聞き手である。それぞれの連におい

て指示対象を「この」とコ系指示詞で指しており、現場指示の融合型と考えることができる。そうだとすると、語り手と聞き手の位置が同一的と見なされていることになる。

第1連にあらわれる「みち」はコ系指示詞で指されているため、語り手と「榎」の近くにあることが読み取れる。同様に第2、3連での「みち」が「この」で指されているため、第2連での「みち」は語り手と「かえろ」から、第3連の「みち」は語り手と「案山子」から近い距離にあることが示されている。「みち」がア系指示詞で指されていた場合、その表現はどう変化するだろうか。

[6] あのみちのさきには、/（中略）/あのみちをゆうこうよ。

「みち」は語り手と聞き手から離れたところにあると表現される。大きな森、海、都に続く「みち」は語り手と聞き手にとって遠い存在であると感じられる。しかしこの詩では「この」と指されることで、大きな森、海、都へ続く「みち」は語り手と聞き手から遠くにあるのでも、見えないところにあるのでもなく、語り手と聞き手の目の前にあることを表現している。

第4連では、聞き手が「みんな」となっている。この「みんな」とは誰を指しているのだろうか。第1～4連であらわれる「このみち」がすべて同じ「みち」を指す場合、「みんな」は語り手、「榎」、「かえろ」そして「案山子」を示すと考えられる。一方、第1～4連の「このみち」がそれぞれ違う「みち」を示す場合、「みんな」は語り手の周りにいるたくさんの人を指すとも考えられる。それだけでなく「みんな」は読者を指すとも考えることも可能である。「みんな」が読者も指すと考えた場合、語り手は「みんな」に呼びかけているので読者が聞き手となる。読者が聞き手の場合「このみち」は語り手のいる現場にある「みち」だけでなく、読者のいる現場にある「みち」を指すと読み取れることも可能である。なぜなら、第1～3連の「みち」がそれぞれ異なるとした場合、語り手はそれぞれの聞き手に寄り添い聞き手のいる現場に目を向けているからである。それと同様に第4連でも語り手は聞き手である読者に寄り添い読者のいる現場に目を向けているとも読み取れる。第4連における現場指示は、読者が語り手のいる現場へと誘われるのではなく、あたかも語り手が読者の現場を共有しているかのように受け取ることができる。

この詩の指示詞はそれぞれ現場指示の融合型だと前述したが、融合型であることで何が表現されているだろうか。指示詞を「その」に代え、対立型を使用した場合にどのよ

うな表現の違いがあらわれるか考えてみよう。

[7] そのみちのさきには、 / (中略) / そのみちをゆこうよ。

ソ系指示詞で指すことは、語り手は指示対象を聞き手側のものであると捉えていることを表わす。「みち」は語り手と聞き手が共有しているものでなく、聞き手だけのもののように感じられる。語り手が聞き手とともに「みち」を歩んでくれるというより、聞き手にその「みち」を歩むように促していると読み取れる。この詩では「みち」を「この」と指すことで、語り手が聞き手と「みち」を共有し、一緒に歩もうとしている思いが表現されている。

この詩でコ系指示詞が用いられていることで2つのことが表現されていた。1つは「みち」は語り手と聞き手から近いところにあること。大きな森、海、都など何かにつながっている道は、どこか遠くにあるのではなく、目の前にすぐそばにあることを表現している。2つ目は、語り手が聞き手との位置を同一的に捉えていること。語り手は「みち」を聞き手側のもの、聞き手1人だけで歩むものと捉えているのではなく、聞き手と共有し一緒に行こうとしている思いが表れている。

2.4. まとめ

2節では、日本語記述文法研究会(2009)から現場指示の用法を踏まえ、現場指示が用いられた詩を分析した。この分析から、詩において現場指示が果たす役割が見えてきた。それは、現場指示によって語り手と(聞き手がいる場合は)聞き手と指示対象の位置関係が示され、より具体的に詩に描かれている現場が想像されることである。現場指示は、現場にいない読者に詩として詠まれた現場を見せ、読者をその現場に引き込む役割を果たすことができる。また詩においては、語り手がいる現場と読者のいる現場の2つの現場が存在するため、語り手が読者の現場の対象を指示する場合がありますと考えられる。その場合、読者の現場をあたかも語り手が共有しているかのように表現される。

3. 観念指示があらわれる詩の分析

3.1. 観念指示とは

日本語記述文法研究会(2009)では、観念指示⁶とは、指示対象が話し手や聞き手の長期記憶の中にあることだと書かれている。観念指示ではア系の指示詞が用いられる。

〔8〕 [以前に食べたものを思い出して] 「あのピザは美味しかった。」

また、日本語記述文法研究会では、観念指示が用いられる場合として、話し手と聞き手に共通の知識・体験がある場合と独り言の場合など⁷が挙げられている。

話し手と聞き手に共通の知識・体験がある場合とは、話し手が聞き手も知っていると考えられる対象を指示することである。

〔9〕 A 「昨日、田中に会ったんだ。」

B 「あの人、結婚したって聞いたよ。」

独り言の場合とは話し手が自分自身に話しかける場合で、話し手が自分の記憶にある対象を指示することである。

〔10〕 「あんなにがんばったのに、なんで落ちたんだろう。」

観念指示の指示詞では、指示対象が話し手や聞き手の記憶にあるが、詩に観念指示があらわれた場合、読み手の記憶の中にはその指示対象はないはずである。この場合観念指示によって読み手は何を感じ取るだろうか。

3.2. 過去と現場の結びつけ ～仲なおり～

仲なおり

げんげのあぜみち、春がすみ、
むこうにあの子が立っていた。

あの子はげんげを持っていた、
私も、げんげを摘んでいた。

あの子が笑う、と、気がつけば、
私も知らずに笑ってた。

げんげのあぜみち、春がすみ、
ピイチク雲雀が啼いていた。

(金子2004b, p.120)

この詩の時制はすべて過去である。しかし過去の時制は完了した出来事を示すだけではない。森山(2002, p.146)は、状態を表わす文で、継続している状態の発見や気づきを表わす場合、その動作が完了していなくても過去の時制が使われると述べている。この詩の文はすべて状態を表わす文である。この詩は発話現場における語り手の発見、気づきが書かれている。

この詩で最初にあられる指示詞は、第1連の2行目の「あの子」である。庵(1999)は談話の初期段階において「あの～が」の述語が「状態」のときは、観念指示だと述べている。

[11] あっ、あの手紙が破れている。

したがって第1連の2行目の「あの子」は現場指示ではなく観念指示である。その「子」は語り手の記憶の中にある対象なのだ。「仲なおり」という詩の題名から「あの子」は語り手とケンカをした相手であることが読み取れる。さらに、以下に示すように対象である「子」が「あの」で指されていることでも、その「子」が語り手のケンカ相手であることが表現されている。「あの子」の代わりに、名前(仮に「順子」とする)をいれて表現をかえてみよう。

[12] げんげのあぜみち、春がすみ、
むこうに順子が立っていた。

この場合、語り手と「順子」がケンカをしているようにはあまり感じない。「あの子」と観念指示で指されている方が、ケンカをしているように感じられる。それはなぜだろうか。「順子」と表現した場合は、むこうに立っている人を見てその「子」の名前を呼んでいるだけである。しかし「むこうにあの子が立っていた。」の場合、語り手は、語り手の見ている先に立っている人と語り手の過去の記憶の中にある「子」を結び付けているのだ。そのことは、その「子」と語り手の間に過去に何かがあったことを感じさせる。ま

た、語り手が記憶から指示対象を引き出してくるということは、語り手にとってその対象は気になる存在であることを読み手は感じる。そして「仲なおり」という言葉から、語り手と「あの子」がケンカをしていることが読み取れるのだ。では観念指示「あの」を文脈指示「その」に代えた場合、どのような表現の違いがあらわれるだろうか。

[13] むこうにその子が立っていた。

文脈指示にした場合は指示対象がこの文以前に現れないため「その」が何を指しているかわからない。「その子」がケンカ相手であるとは読み取れない。「その子」がケンカ相手だと示すためには、[13]の前に、

[14] 私は友達とケンカした。

などの文脈が必要である。また文脈指示の場合は聞き手の存在が感じられる。独り言の場合は指示対象がア系指示詞で指されるからだ。観念指示では語り手と指示対象の「子」の関係だけが表現されるが、文脈指示では語り手と「子」の関係と語り手と聞き手の関係という2つの人間関係が表現される。このように、独り言の観念指示によって語り手にとって「あの子」が唯一の友達であることが示される。

次にあらわれる指示詞は第2連の「あの子」である。第1連で語り手は指示対象が現場にいることを発見している。記憶の中の対象が現場にいると気づいた後は、指示対象を現場のものとして指示する。

[15] あっ、あの手紙がここにあった。

[前文と同じ手紙を指して]あっ、この(?あの)手紙は山田さんからだったんだ。

そのため第2連の「あの子」は現場指示と考えられる。第3連の「あの子」も同様に現場指示だといえる。ア系指示詞が用いられているため、第1連と同様に指示対象の「子」と語り手は離れている状態である。しかし、第2連では「私」が「あの子」とげんげを摘むという同じ行為をしていることに気がついた。さらに、第3連においても「あの」から、語り手と「子」の距離がはなれていることが表現されているが、「私」は「あの子」

がわらっていると自分自身もわらっていることに気がついた。2人の気持ちを表す表情について描写され、「笑う」というプラスの気持ちが表れている。第2、第3連では「私」と「あの子」の間の空間的距離は離れているが、心理的距離が徐々に縮まっていることが読み取れる。そして第4連では、「あの子」という言葉は書かれていない。第1連では「むこうに」、第2、3連では「あの子」と、語り手と指示対象の「子」と距離が離れている描写があったが、第4連ではそのような描写はもう書かれていない。そのことから、「私」と「あの子」のとの距離が、心理的にも空間的にも縮まったことが感じられる。そして心が晴れたとき、「私」の耳に今まで聞こえていなかった「雲雀」の啼き声が入ってきたのである。2人が仲直りをしたことが読み取れる。

第1連の観念指示によって指示対象が語り手の記憶の中にある対象だということが示されている。現場にいる指示対象を記憶の中の対象と結び付けていることで、過去において語り手と指示対象につながりがあり、その過去を語り手が気にしていることが表現されていた。また、「あの」と指示対象を指すことで語り手と指示対象の関係だけが示され、「あの子」が語り手の唯一の友達であることを表わしていた。

3.4. 観念と現場の対立 ～忘れた唄～

ここでは、観念指示のア系指示詞と現場指示のコ系指示詞があらわれる詩を見ていく。この2種類の指示詞が用いられていることで、読み手に何を感じさせているだろうか。どのような表現効果があるだろうか。

忘れた唄

野茨のはなの咲いている、
この草山にきょうも来て、
忘れた唄をおもいます。
夢より遠い、なつかしい、
ねんねの唄をおもいます。

ああ、あの唄をうとうたら、
この草山の扉があいて、
とおいあの日のかあさまを、

うつつに、ここに、みられましょ。

きょうも、さみしく草にいて、
きょうも海みておもいます。
「船はしろがね、櫓は黄金」
ああ、そのあとの、そのさきの、
おもい出せないねんね唄。

(金子2003a, p.142)

この詩で最初にあらわれる指示詞は第1連の「この草山」である。「この」は現場指示の指示詞であり、語り手が「草山」にいることを示している。「この草山にきょうも来て」という動詞からも語り手が「草山」にいることがあらわされている。第2連では、観念指示のア系指示詞と現場指示のコ系指示詞が交互に出てくる。第2連で始めにあらわれる指示詞は、1行目の「あの」だ。「あの」で指されている「唄」は第1連の「忘れた唄」、「ねんねの唄」のことだ。その「唄」は現場にあるのではなく（語り手に聞こえたり、語り手がうたったりしているのではなく）、記憶のなかに存在しているものだ。第2連の2行目では指示詞「この」があらわれる。現場指示のコ系指示詞で修飾された「草山の扉」は語り手の目の前にあるのだ。そして3行目では指示詞「あの」がでてくる。「あの」で指示されている「日」もしくはその「日のかあさま」が語り手の記憶の中にある対象であり、語り手の目の前には存在していないことを表している。最後に第2連の4行目で指示詞「ここ」があらわれる。「ここ」は語り手のいる場所を指している。

第2連を見ると、「…たら」と仮定条件が使われている。1行目に書かれている条件をクリアしたときに2、3、4行目のことが起き得るのだ。しかし語り手は「唄」をうたえない。ということは、語り手は「あの日のかあさま」を「うつつに」、現実に見ることができないのである。「あの日のかあさま」も「あの唄」と同様に語り手はそれをはっきりと思い出すことができない。「あの唄」と「あの日のかあさま」と対照的なものとして、「この草山の扉」と「ここ」がでてくる。「この草山」と「ここ」は語り手の目の前にあるもの、語り手をはっきりと目にする事が出来るものだ。観念指示のア系指示詞と現場指示のコ系指示詞が交互に表れることで、語り手の記憶の中にしかないものと語り手のいる現場にあるものが対比され、その2種類のものの差が強調されている。「あの唄」と「あの日のかあさま」をはっきりと思い出すことが出来ないこと、現場にあらわれな

いことへの語り手の寂しさを強く感じる。

観念指示のア系指示詞は、詩に書かれているよりも以前のこと、語り手の記憶にある過去を感じさせる。一方、現場指示のコ系指示詞は語り手が現在いる現場にあるもの、それも語り手のちかくにあるものを表している。この2種類の指示詞があらわれることで、今語り手の目の前にあるものと、そうではない記憶の中にしかないものとの差が強調されている。

3.3. まとめ

3節では、日本語記述文法研究会（2009）で述べられた観念指示の用法をもとに、観念指示があらわれる3つの詩の分析を行なった。この分析から観念指示は、詩には書かれていない、語り手の指示対象との過去を読者に感じさせることがわかった。

詩における観念指示の指示対象は、読者の記憶の中には存在していない。しかし観念指示によって、読者は語り手が過去において指示対象とつながりがあったこと、もしくは知覚があったことが読み取れる。また観念指示は、指示対象が語り手のいる現場には存在していないことを表わしている。現場に指示対象が存在することもあるが、それは発見や気づきの場合であり、語り手が指示対象を気にしていたことが表現される。

4. 文脈指示があらわれる詩の分析

4.1. 文脈指示とは

文脈指示とは、言語化された文脈の中の要素が指示対象となる場合である。

[21] きれいな水でしか生息できない魚がいる。 その魚が家のすぐ近くの川で発見された。

庵は（2007）文脈指示だけに結束性があると述べ、結束性を以下のように定義づけている。

ある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包しているとき、その文は先行/後続する文（連続）に解釈を依存しており、そのことによってその文全体でテキストを構成する。この場合、その文連鎖は「結束的（cohesive）」であり、そのテキストには「結束性（cohesion）」が存在する。（庵 2007, p.10）

文脈指示による文と文のつながり方から詩の表現を考察する。

4.2. 文脈指示のパターンと逸脱 ～蓮と鶏～

蓮と鶏

泥のなかから

蓮が咲く。

それをするのは

蓮じゃない。

卵のなかから

鶏がでる。

それをするのは

鶏じゃない。

それに私は

気がついた。

それも私の

せいじゃない。

(金子2004b, p.58)

この詩では4つの指示詞があらわれる。その指示詞はすべて「それ」であるが、指示対象はそれぞれ異なっている。第2連の「それ」は第1連の内容を、第4連の「それ」は第3連の内容を指している。この2つの指示詞は直前にある1連だけを指すという一定のパターンが見られる。第5連の指示詞はそのパターンとは異なり、「それ」は第1～第4連全体を指す。第6連では第3、4連の指示詞と同様に「それ」は直前の連の内容を指示している。

第4連までに現れる指示詞が同じパターンを持っているのに対し、第5連の指示詞はそこから逸脱している。このため第5連が目立ち、記述された「私」が第1～4連に登場する「蓮」と「鶏」より特別な存在だと感じさせる。もしくは「私」が第1～4連の内容を発見したことに重点が置かれそうである。しかし、第5連の内容を指す第6連の指示詞は第3、4連と同じパターンにしたがっている。「蓮」と「鶏」について発見をした「私」はそれらのものより特別な存在だと思われがちであるが、そうではないことを表現している。「蓮」も「鶏」も「私」も、自身の力ではなく他の存在によって動かされ、支えられて生きているのだ。この詩から地球上にある自然や動物、人間は、それらを越えた存在によって支配されているという普遍性が読み取れる。第6連で同類の事柄を並列する意味を示す「も」が使われていることから、「蓮」と「鶏」と同様に「私」の気づきは他の存在によって引き出されていることが示されている。

この詩における指示詞の規則性に注目し、詩の表現を考察した。この詩では指示詞の使われ方に一定のパターンが見られるとともに、そのパターンから逸脱した指示詞もみられた。「蓮と鶏」では、この詩における指示詞の一定のパターンと逸脱から、詩に登場する「蓮」と「鶏」と同様に「私」にも通ずる普遍性があることが表現されていた。第1連から第4連を一旦統合する第5連が、第6連で再び指示詞の指示対象となる繰り返しのパターンは、詩を読む読者にもその普遍性が及ぶことを感じさせる。

4.3. まとめ

4節では文脈指示の指示詞が文と文につながりを持たせるという役割を踏まえ、文脈指示の指示詞があらわれる詩の分析をおこなった。詩において文脈指示は、指示詞がある文と、指示対象がある文に記述された事象に関連があることを表わし、そこに生まれる結束性は連の間に回帰的な構造を創り出すことができる。

5. 結論

本論では詩において指示詞が何を表現しているか、読者に何を感じさせるかを問いとして詩の分析を行ってきた。この問いに対して、本論では以下の3つを結論としてあげる。

1つ目に、現場指示は、語り手と（聞き手がいる場合は）聞き手と指示対象の位置関係を表現し、現場にいない読者に詩として詠まれた現場を具体的に想像させる役割を果たしている。また詩においては、語り手がいる現場と読者のいる現場の2つの現場が存

在するため、語り手が読者の現場の対象を指示する場合があると考えられる。その場合、読者の現場をあたかも語り手が共有しているかのように感じさせる。

2つ目に、観念指示は、指示対象が語り手の記憶にあることを示し、詩に書かれていない語り手と指示対象との過去を読者に感じさせる。また、観念指示によって指示対象が語り手のいる現場には存在していないことが表わされる。現場に指示対象がいる場合には、発見や気づきを示し、詩の背景に時間の流れを創り出す。

最後に、文脈指示は、指示詞がある文と指示対象がある文に記述された事象の間に関連を産み出し、詩に構造を与える。

本論では金子みすゞの詩をいくつか取り上げて研究を行なった。しかし、金子みすゞの詩には指示詞が使用された詩がまだ多くある。引き続き詩における指示詞に注目し分析を行なうとともに、金子みすゞの詩における指示詞の用い方の特徴を研究することが今後の課題である。

注

- 1 「テキスト」とは「意味的にひとまとまりをなす文（連続）」（庵2007, p.8）である。
- 2 本論の例文はいずれも庵（1999, 2007）、日本語記述文法研究会（2009）を参考に筆者が作ったものである。
- 3 日本語記述文法研究会（2009）では、「現場文脈指示」とされているが、本論では「現場指示」（庵 2007）とする。
- 4 金水・田窪（1990）は、話し手と聞き手との対象までの物理的距離だけでなく、対象の操作可能性、対象の所有・所属関係からコ系とソ系の使い分けがなされるとしている。
- 5 本論では、詩の中で1人分の発話しか現れない場合と2人分の発話が見れるがお互いに対話をしていない場合は発話者を「語り手」とし、2人の対話書かれている詩では、発話者を「話し手」とした。「語り手」と「話し手」両方とも発話をしている人との意味で使い、特に2つの間に違いはない。
- 6 日本語記述文法研究会では、「記憶文脈指示」とされているが、本論では「観念指示」（庵 2007）とする。
- 7 日本語記述文法研究会は、観念指示が用いられる場合として、
 - ・ 話し手と聞き手に共通知識・共通体験がある場合
 - ・ 独話の場合の他に、
 - ・ 思い出せない場合
 - ・ 話し手の強い思い入れがある場合

を挙げています。思い出せない場合とは、話し手が指示対象の名を思い出すことが出来ず、聞き手がその指示対象を知っていると思われたときである。以下に例を挙げる。

[1] A「あれ、なんて言うんだっけ？ほら、シュークリームみたいなやつの上にチョコがなかったやつ。」

B「ああ、エクレアのこと？」

A「そう、それ。」

話し手の強い思い入れがある場合とは、聞き手が指示対象を知らなくても、話し手の思い入れの強さのあまり観念指示を用いる場合だ。

[2] A「〇〇っていうケーキ屋さんがあるんだけど。」

B「その店知らない。」

A「あそこのケーキすごくおいしいんだよ。」

話し手の思い入れの強さのあまり、文脈ではなく記憶の中から指示対象が読み込まれる。しかし、書き言葉では文脈に存在する指示対象をア系指示詞で指しにくい。

参考文献

- 庵 功雄 (1999) 「ア系統指示詞の用法に関する一考察」『現代日本語研究』6号 pp.100-114 大阪大学文学部日文学科現代日本語学講座
- (2007) 『日本語研究叢書21 日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 金水 敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」金水 敏・田窪行則 (編) (1992) 『指示詞－日本語研究資料集』pp.123-149 ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法7』くろしお出版
- 森山卓郎 (2002) 『表現を味わうための日本語文法』岩波書店

資料

- 金子みすゞ (2003a) 『金子みすゞ童謡全集 1 美しい町・上』JURA 出版局
- (2003b) 『金子みすゞ童謡全集 2 美しい町・下』JURA 出版局
- (2004a) 『金子みすゞ童謡全集 3 空のかあさま・上』JURA 出版局
- (2004b) 『金子みすゞ童謡全集 4 空のかあさま・下』JURA 出版局
- (2004c) 『金子みすゞ童謡全集 5 さみしい王女・上』JURA 出版局
- (2004d) 『金子みすゞ童謡全集 6 さみしい王女・下』JURA 出版局

ABSTRACT

In this article, I analyze poems by Misuzu Kaneko, focusing on how Japanese demonstratives help the reader perceive the world the poet creates. The analysis is based on the classification of Japanese demonstratives discussed in Iori (2007).

First, demonstratives with exophoric reference based on spatial relations presuppose concrete relations between the referent, the speaker, and the hearer in space. In the case of poems, there is one more perspective involved: the reader, who may or may not be the same as the hearer. This means that a poem may assume the existence of two distinct worlds, one with the speaker (and the hearer) in it, and the other with the reader and the poem in it. The demonstrative *kono* (*this*) with exophoric reference based on a spatial relationship can bring the two worlds together, as in the poem *Fusuma-no E* (*The Picture on the Sliding Doors*), in which the poet pretends to be in (a picture of) a forest on sliding doors. Not only does she succeed in making the reader feel that she is close by, but also she takes the reader into another world deep in the forest. In the poem *Kono Michi* (*This Path*), on the other hand, the same demonstrative captures the moment the poet comes out of the poem and urges the reader to follow the path that lies ahead, with the poet walking beside them.

Second, demonstratives with exophoric reference based on a notional relationship signal that the referent is in the speaker's memory. They are used in cases where the speaker and the hearer share information or experience, or in monologues. In poems, this usage prompts the reader to infer that the referent has had a certain relationship with the speaker in the past. The demonstrative in the first stanza of *Naka-naori* (*Friends Again*) tells the reader that it is a monologue, which in turn implies that the referent of *ano ko* (that girl) is the speaker's only friend. The poem *Wasureta Uta* (*The Song I Cannot Recall*) uses *ano* (that) based on a notional relationship and *kono* (this) based on a spatial relation. Together they emphasize the gap between the speaker's distant memory of her mother and the reality in which she cannot even recall the second half of the song her mother used to sing.

Finally, demonstratives with endophoric reference build cohesive relations among the expressions in the discourse. In *Hasu-to Niwatori* (*The Lotus and the Chicken*), the use of cohesive relations in a recursive pattern creates a structure that suggests to the reader that the being that watches over and guides the lotus, the chicken, and the speaker's consciousness, is perhaps even watching over the reader as well.